

かたりべ 87

豊島区立郷土資料館だより



現在の巣鴨地蔵通りの賑わい



流行菊の花揃 巣鴨 植木屋弥三郎 (胡蝶園画)



巣鴨庚申塚 (歌川広重画「絵本江戸土産」所収)

あ・ら・すがも！「し巣鴨？ぞくねつ巣鴨」

郷土資料館では、来る一〇月二四日(水)から一二月九日(日)までの会期中、企画展「A・L・A・SUGAMOへあ・ら・すがも」——中山道と巣鴨地域——を開催いたします。

現在の巣鴨地域は、江戸六地蔵のひとつが所在する真性寺や、とげぬき地蔵(高岩寺)が面する巣鴨地蔵通りを中心に、連日多くの人々が集う「街」として、豊島区を代表する観光地のひとつとなっています。そもそも江戸時代の巣鴨地域は、大都市江戸の北側に位置する一農村でした。しかしながら、村の北側を走る中山道沿いを中心に徐々に町場化が進み、巣鴨町と巣鴨真性寺門前のふたつの町は、延享二年(一七四五)に江戸の一部に組み込まれました。およそ現在の文京区との区境付近から巣鴨庚申塚の街道沿い部分が該当します。その後、一九世紀になると、巣鴨の植木屋たちによる菊づくりが評判を呼び、菊見客で大いに賑わう時期もみられました。

今回の企画展では、江戸時代の巣鴨地域をおもに中山道との関わりから考えてみたいと思います。巣鴨村支配に関する古文書、中山道とともに描かれた絵図類、当時の旅道具、菊見を描いた浮世絵といった資料を駆使しながら、「巣鴨の賑わいの原点」に迫ってみることにしましょう。会期中、皆さんお誘い合わせのうえ、是非ご来館ください。

(秋山)



企画展「A・L・A・SUGAMOへあ・ら・すがも」——中山道と巣鴨地域—— ★会期…一〇月二四日(水)～一二月九日(日) ★休館日…毎週月曜日および一一月三日(土)、一一月二八日(日)、一一月二三日(金) ★企画展みどころ解説…一一月一〇日(土)、一一月二四日(土) 一四時～一五時(事前申し込み不要) ★展示準備のための臨時休館…一〇月一五日(月)～二三日(火)

郷土資料館収蔵資料展「戦争を考える夏 二〇〇七」開催中

戦時下の国民貯蓄目標と隣組

郷土資料館では、現在、収蔵資料展「戦争を考える夏 二〇〇七」を開催しています。そこで展示している政府広報誌「写真週報」には、戦後の戦争参加として節約・貯蓄運動が、何度も取り上げられています。また、国債や各種債券の募集ポスターも展示しています。

節約によって浮いた物資を戦争用にまわし、その分のおカネを貯蓄して債券を買い、それが軍需産業に投資される。国民の節約と貯蓄は戦争続行にはどうしても必要なものとなりました。戦争は膨大な資材消耗戦でもあったのです。

どんどん上がる貯蓄目標
戦争費用のための国民の貯蓄増加目標が一九三八（昭和一三）年度から定め

られました。目標額は次のように年々上がっていきました。

- 一九三八（昭和一三）年 八〇億円
- 一九三九（昭和一四）年 一〇〇億円
- 一九四〇（昭和一五）年 一二〇億円
- 一九四一（昭和一六）年 一七〇億円
- 一九四二（昭和一七）年 二三〇億円
- 一九四三（昭和一八）年 二七〇億円
- 一九四四（昭和一九）年 三六〇億円

このうち、一九三八年と一九四〇年は実績で目標を若干下回りましたが、他は超過達成しています（一九四四年は不詳）。念のため述べておきますと、この目標額はその年度の新規貯蓄分であって、貯蓄累計ではありません。

この目標を達成するため、「必勝貯蓄国民運動」といったキャンペーンが繰り返して行われました。

隣組で割当て

目標の具体化になくはならなかったのが、展示でも取り上げた隣組です。住民の自治・親睦機関であった町会内の隣組は戦争動員の多くの仕事の実行機関とされますが、貯蓄目標達成もその仕事の

一つでした。目標額は、道府県→市町村

↓町内会へと割当・配分され、「各隣組では、これに基づいてそれぞれ一年分の国民貯蓄組合の貯蓄額と国債債券の割当額とを決めます。」「この目標額は、必ず達成するといふ決意を固め、その方法を練って貰はねばなりません」（『週報』三四二号）ということになります。その方法たるや、町会で最後に残った目標を達成するために「満場声なく黙してゐた時、一人の翼壮団員が進み出て、「それなら自分の家を売り飛ばして一人で引き受ける」と申し出ました」との例が美談的に語られるようなものでした（同前）。

展示中の豊島区の隣組でも、常会で貯蓄や国債・債券の割当などが度々とりあげられています。（あおき）

◇収蔵品展「戦争を考える夏 二〇〇七」は一〇月一四日(日)まで

※休館日は月曜日・第三日曜日・祝日・九月一八日・一〇月九日

◇構成：Ⅰ（民衆動員）のかたち Ⅱ戦時下の暮らしと隣組 Ⅲ疎開地と家族をむすぶ一五〇通余の手紙から Ⅳ空襲下の豊島区

●紹介・秋元美子著「私の集団疎開 遙かなる記憶を辿って」

区内在住の秋元美子さんから、自著「私の集団疎開 遙かなる記憶を辿って」を寄贈いただきました。この本は、集団学童疎開を中心とする戦時下と敗戦直後の思い出を綴られたものです。秋元さんが長崎第三国民学校（現・権名町小学校）に入学された一九四一（昭和一六）年は、小学校が国民学校に変わった年で、中国との戦争に続いて、この年の一二月対米英戦争が始められます。そして四年生の夏、親や姉妹と別れて、山形県東根町東根温泉への集団疎開に参加されました。イナゴ採り、農作業、シモヤケ、……、疎開先の暮らしが自筆の絵とともに語られます。「二度とあってはならない戦争」「もう誰にもさせたくない集団疎開」、この思いが、秋元さんに執筆を決意させたのでした。（文芸春秋企画出版部、二〇〇七年発行）（あおき）



国債や各種債券の募集ポスター



釣竿職人さんと資料の整理

資料館にはさまざまなものが寄贈されます。今回は、丸井一史さん（南池袋）から寄贈された釣竿を紹介いたします。釣竿は、ご本人の明治生まれのおじいさんが、使用したり趣味として収集したものでないかといわれ、竹製をはじめ金属製のものまで本数は多く、また、釣竿を入れ

る筒もあります。整理・記録の方法に苦慮していたところ、当館の展示をよくご覧にいらつしやる元釣竿職人の方と展示室で会いました。その方は、松原栄治さん（東池袋）です。事情を話すと、釣竿の名称・見どころ・作り方等、資料として記録、保存するために教えてくださる

と言ってくれましたので、調査員の方と、資料整理の機会をもちました。知らないことを知ることはとても楽しいことです。松原さんのおっしゃることを、一言も漏らすまいと記録に努めました。

釣竿は、一種類の竹で作られているのではなく、また、竹以外の素材が部分的に使われていることがわかりました。これらの釣竿は、いずれ展示室で公開する予定ですが、ここでは、その調査の一端を紹介したいと思います。

釣りをする人であれば当然知っていることですが、

釣竿は、釣る魚の種類によって異なるようです。しろぎす竿、たなご竿、まぶな竿、そしてはぜの中通し竿等は、江戸の伝統的な釣竿の種類としてあります。釣竿は、六本とか八本の竹がつかないままです。一般に、手で持つところをテモトといい、ハチクと呼ぶ竹を使っています。最も先端の部分をホサキといい、マダケを削り、皮を残し、丸く細く削ったものを使います。テモトとホサキの間には、ヤダケあるいはホテイという竹を使います。約五〇組ほどある釣竿のなかには、ホサキが黒くてよくしなるものがありました。それは、クジラの髭ヒゲでした。



松原さんの話を聞く。釣竿に収蔵票をつけ資料にする。

竹は、竹屋から調達しますが、自分で千葉や東海道線沿いの竹の産地まで見に行くこともあったということです。

釣竿の竹には漆を塗ります。塗るために適している竹は、日本のイタチの毛でできたものといわれています。また、釣竿には釣り糸を巻く糸巻があります。それには象牙が使われていました。

釣竿には焼印があるものもあり、江戸相竿師の系図にみられる「東正とうせい」のものが一本ありました。大正から昭和初期、そして昭和三〇年代くらいまでに作られたこれらの釣竿には、さまざまな材料とその素材を熟知した技が込められていることが感じられました。

栄治さんは、実兄の盛蔵さんとともに釣竿の製作をされていました。お兄さんには、「材料の竹は一年に一回しかとれない。だから材料は大切にするようにと仕込まれた」とおっしゃっていらしたことが印象的でした。

資料館では、日々、資料の整理をしています。それは、資料として記録し、後世に伝えるためですが、教科書でも百科事典でも調べられないことがよくあります。そのときには、今回のように、職人さんの知識とご厚意に頼ることもしばしばあり、ありがたく思っています。（福岡）



釣竿をやさしく手にする松原栄治さん 2007年6月28日

郷土資料館特製みやげ 好評販売中！ 鬼子母神詣土産べんけい図ふくしき

郷土資料館では、特製みやげを販売しています。縮緬風の黄色地にすすきみみずくが染められたふろしきです。この絵は「鬼子母神詣土産べんけい図襖」(今宮樹美枝氏寄贈)からとっています。

ご存知のように、雑司が谷鬼子母神は、江戸時代から安産・子育ての神として信仰を集め、八の日の縁日や十月のお会式には多くの参詣客で賑わいました。延享二年(一七四五)に江戸の町に編入された鬼子母神門前には、茶店や料理屋が軒を連ね、物見遊山の場として「江戸名所」の一つに数えられました。

その参詣土産として有名だったのが、すすきの穂で作ったみみずく、麦藁細工の角兵衛獅子、風車、川口屋の飴などでした。それぞれの由来や製作時期については不明な点が多いのですが、享和年間(一八〇一～〇四)刊の喜多川歌麿画

「玄英の雑司ヶ谷詣」には風車が、天保年間(一八三〇～四四)刊の歌川広重画「江戸高名会亭尽 雑司ヶ谷之図」には角兵衛獅子とすすきみみずくを持つ参詣客が描かれています。

また「江戸名所図会」(天保五～七年刊)

には「べんけい」(巻藁)に風車、角兵衛獅子、すすきみみずくを挿して店先で売っている様子が描かれています。角兵衛獅子については、寛延二年(一七四九)高田四ツ家町の久米(くめ)という少女が親孝行をするために作り始めたとの記述があり、江戸中期には作られていたようです。一方、すすきみみずくに関する記述は見当たりませんが、こ

れと同様の話が伝わっています。くめという孝行娘が母親の病氣快復を鬼子母神に祈願したところ、鬼子母神が蝶の姿になって現れ、すすきでみみずくを作って売ることを教え、これが評判となり薬代ができて母親の病氣が治ったというものです。

下の「べんけい図」は、落葉があることからお会式の頃を描いたものと思われ、作成年代や作者は不明です。ここには風車と角兵衛獅子は

なく、蝶と達磨が描かれています。

現在も売られているのはすすきみみずくだけですが、長い耳(羽角)は赤く染めた経木、丸い大きな目は輪切りにした黍殻、くちばしは黒く染めた竹で作られ、赤い短冊がぶら下がっています。また蝶の羽には、達磨と赤鯛、ザクロが描かれています。ザクロは鬼子母神の神紋で、現在も絵馬に描かれています。

江戸時代、疱瘡(天然痘)除けのために作られた疱瘡絵には、このように長い耳をもつみみずくや達磨、赤鯛など赤い色の玩具が多く描かれました。この絵に



も、流行病などから子どもを守り、健やかに成長するようにとの願いが込められているものと思われます。(横山)

◆価格一三〇〇円(七〇×六七cm、レーヨン製)。郵送も可能です。詳しくは電話でお問い合わせください。

編集後記

残暑お見舞い申し上げます。現在開催中の「戦争を考える夏」に引き続き、一〇月二四日から果鴨をテーマとした企画展が始まります。ご期待ください！

八七号から編集担当が交替しました。今回、郷土資料館特製みやげのふろしきを紹介しましたが、こんなグッズが欲しい！などご希望がありましたら、ぜひお寄せ下さい。今後の参考とさせていただきます。(よこ)

かたりべ

No.87

2007年9月5日

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351

http://www.museum.toshima.tokyo.jp